



繪本三國妖婦傳

中編

一

^ 13  
2892  
6



13  
2892  
6

叙

高蘭山巽

高伴恭述

高伴恭述

細向妖婦傳初篇梓新馬其苦令婦于妖

初為姐妃乳殷玉于入天為班豆

惠裁此現布于海内之四方童出蒙

雲後頻心今茲中篇嗣出姑于春

波與妖婦辨端汝歸支那傾周

三國大婦傳中篇高

書本高川

イ  
松山本町三丁目  
野中榮三郎  
貸本所  
ヨ

昭和九年三月五日

室。至于來日域化。藻妃近王位備  
 誌。抑妖狐經歷三國之談。瞻灸  
 人口志。腐耳或頗。終其多異。愚  
 謂天地之大也。造化之妙也。殆不可  
 思議。有信。處見。終變。不見者。腐  
 人之情也。如雀為蜃。田氣變。如聖  
 賢之說。可世。信者。何乎。為不  
 見也。如青蛇化蝶。蟬脫。不造化  
 之妙。而自他。不怪者。何乎。親變。視  
 也。然則。一狐。數變。之說。豈一疑  
 可也。又謂。奇說。怪語。多。無益。且  
 教者。多惑。又。如。君子。而云。若。是。

激<sup>ス</sup>惡<sup>ク</sup>者<sup>ハ</sup>則<sup>チ</sup>將<sup>ハ</sup>不<sup>レ</sup>如<sup>ク</sup>烏<sup>ノ</sup>聖<sup>人</sup>又<sup>モ</sup>遇<sup>フ</sup>辨<sup>ス</sup>  
 怪<sup>ク</sup>見<sup>ル</sup>家<sup>ノ</sup>語<sup>ヲ</sup>乳<sup>ク</sup>坤<sup>ノ</sup>大<sup>ノ</sup>河<sup>ニ</sup>怪<sup>ク</sup>乎<sup>ニ</sup>哉<sup>ニ</sup>中  
 篇<sup>ノ</sup>刊<sup>成</sup>也<sup>ニ</sup>特<sup>ニ</sup>新<sup>ク</sup>乞<sup>フ</sup>序<sup>ヲ</sup>家<sup>ノ</sup>大<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>嘗<sup>テ</sup>有<sup>リ</sup>序<sup>ヲ</sup>詳  
 說<sup>ス</sup>其<sup>ノ</sup>首<sup>ヲ</sup>尾<sup>ヲ</sup>具<sup>ス</sup>初<sup>ノ</sup>篇<sup>ニ</sup>更<sup>ニ</sup>何<sup>ヲ</sup>述<sup>ス</sup>仍<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>此<sup>ヲ</sup>贅<sup>ス</sup>  
 卷<sup>ノ</sup>端<sup>ニ</sup>云<sup>フ</sup> 享<sup>和</sup>甲<sup>子</sup>孟<sup>春</sup>

赤峰徳士書



繪本三國妖婦傳中編卷之一

目錄

- 老<sup>翁</sup>孫<sup>晏</sup>に會<sup>フ</sup>に<sup>テ</sup>孫<sup>陽</sup>夫<sup>人</sup>者<sup>ハ</sup>孫<sup>晏</sup>と<sup>同</sup>答<sup>ス</sup>
- 孫<sup>陽</sup>夫<sup>人</sup>惡<sup>ク</sup>謀<sup>ル</sup>成<sup>ル</sup>心<sup>ヲ</sup>表<sup>ス</sup>る<sup>圖</sup>
- 孫<sup>陽</sup>夫<sup>人</sup>太<sup>子</sup>に<sup>テ</sup>説<sup>ク</sup>圖
- 天<sup>皇</sup>の<sup>大</sup>臣<sup>孫</sup>晏<sup>者</sup>孫<sup>晏</sup>と<sup>對</sup>活<sup>ス</sup>る<sup>圖</sup>

美陽夫人耆婆と向答の圖

耆婆一とび面目成るの圖

美陽耆婆と醫者傳を編む耆婆安ん夢を

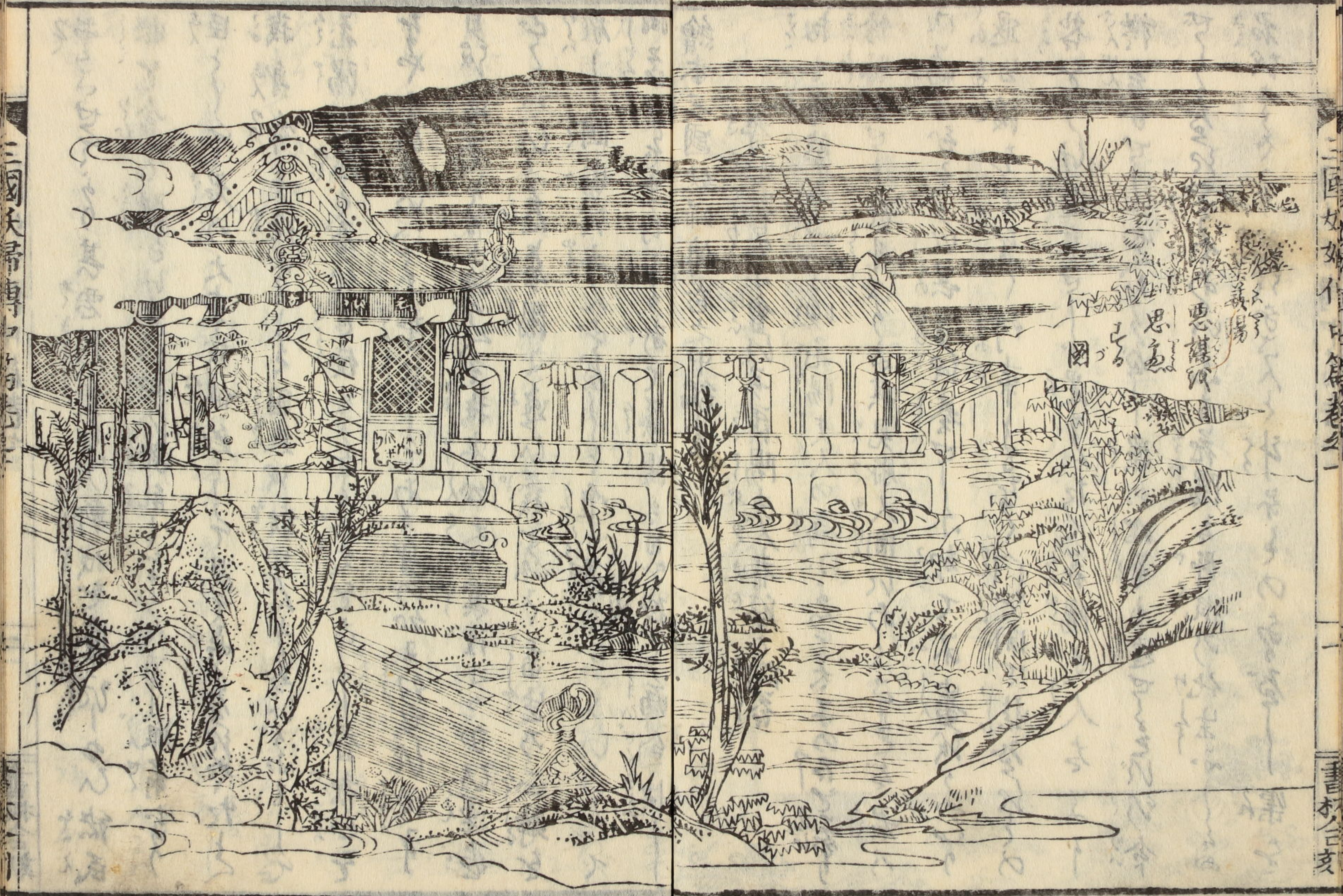
耆婆再び面目と多ひ終る固と以茲に送る圖

麻羯院國の天神夢枕小立の圖

繪本三國女婦傳卷之中編壹

耆婆孫安小會に美陽夫人耆婆と向答

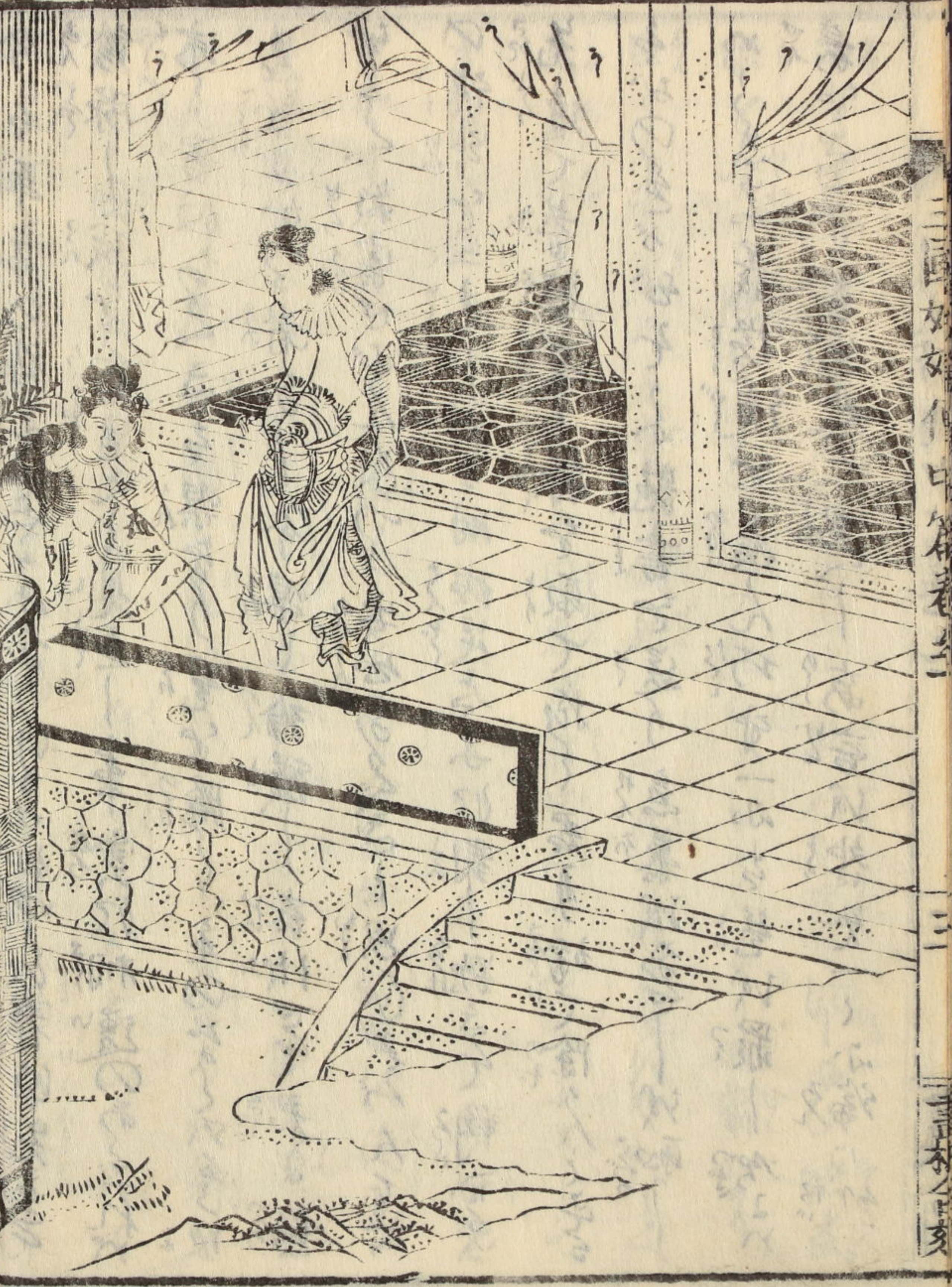
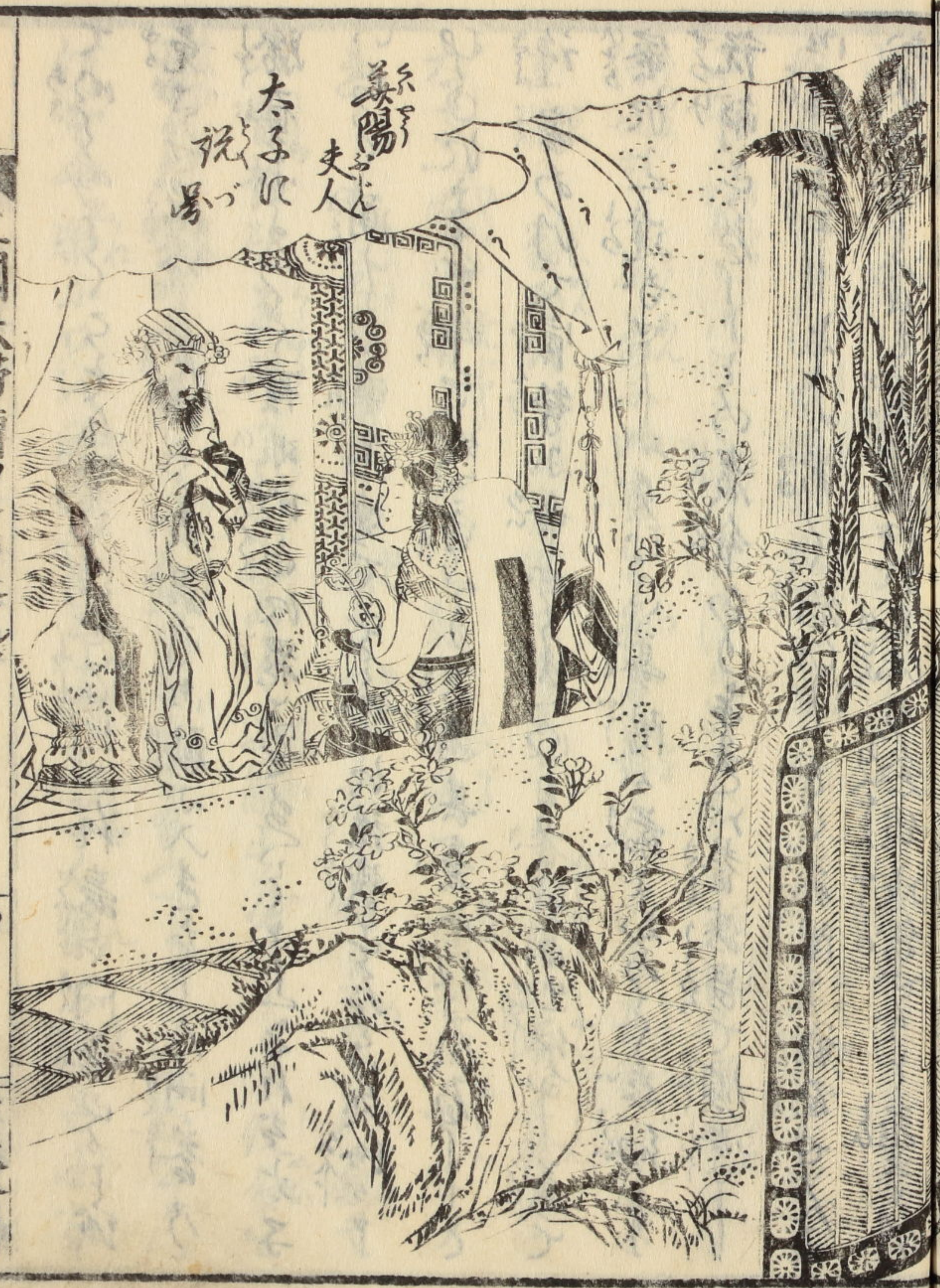
扱も耆婆とるつる頃花陽夫人の病ふる太子の召とあり  
診脈をせしに斗ぶる其見脈人間にありさきさき君の  
心為と分そくに其昔頃夢でふ却て不審成ふより  
退出候わどなく何事もなく門を閉て懐を以との  
答をうけ遍塞でしが是まなく花陽夫人をみる  
終言をせしゆなるが衆の次等も達せしむる命  
びしるを以てやあいうも花陽を野瓶乃化生ふしあ  
君誠をさるり怨恨を人と斗ふものあるが衆を



思  
 思  
 思  
 思  
 思  
 思

忠を以てせざるの其惡於重なる斬伐をせしむるは徳民  
 眼を合しと限かけは國の強亂とならん事眼前なり  
 臣と君乃大事誠偶然と見えて亦るを死やれと  
 我身命を絶するも國恩誠報せん事ありふも  
 花陽を除くを死に便も工をせしむるを  
 事やまはれと禁足してある身のかは死に徒  
 日返送をせらるは此うを我忠公天の眞理小のい運  
 ぞんいひく度花陽は遠い義を以て畜生乃正身を  
 願一國家誠安んぶと唯一節小のいふ人  
 何れをせしむるも形て花陽を日を送て病全快

今も平常の神よとやふありけるが中にも昔婆先を  
 珍脈一我を畜生と見えし事実に相違のあらざれば  
 亦く害にあはざるも渠なり是を降くそのなりを  
 今もかく者あり今渠と論議し言はせし君も怒  
 せし教宗せざんばいつの安んぬと思ひまはんで  
 の徳斗を工支しある時理足太子に對し歌を納め  
 先達て昔婆妾、縁を取て抱く君身好て除くんと  
 今もこのまがむとふ艶書を送り急慕致せし取  
 めくも不義傍道を履ん巧才一ふも是誠罪一  
 畜を以て畜生也と罵し高言以答えし編

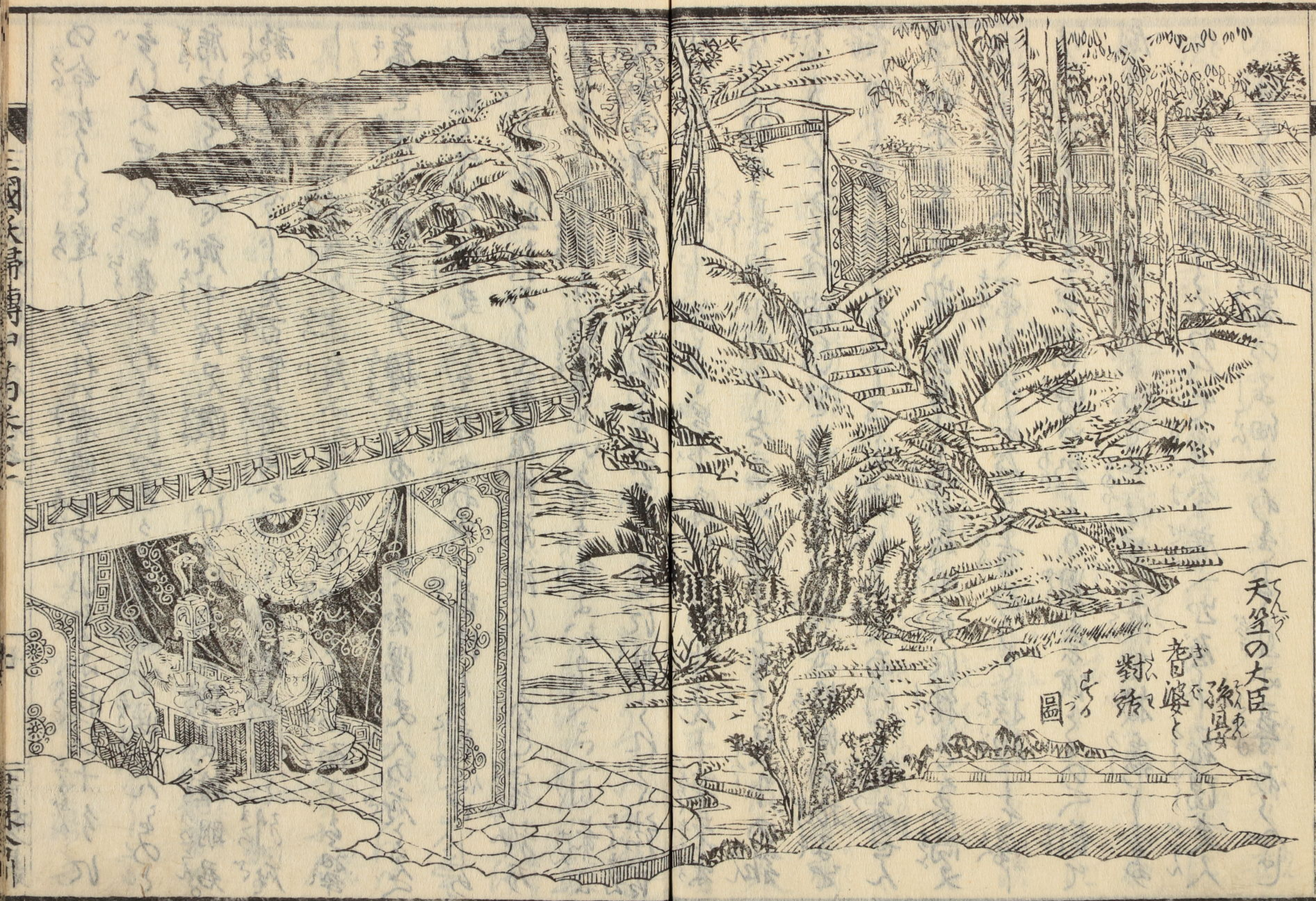




て何れもそくくろそくくろと昔徳をいふれ事と問答するは  
 免させ給ひ是れもまた君乃れ聴ふ入るを人問答乃  
 勝負ふもつゝ理球の白に罪をせよとてとあれが太子  
 いちく聞しる渠先達てよとやりに誅戮さるる知海がや  
 ひよにまをせ命を延べてつゝ子進其意ふはるなりと  
 許密わめて官勢ふ命をよきこの日昔徳ふ出仕命一急て  
 密に上達かて一かりむさ善陽が前よあわく委細や  
 祝解さるる一よの歳命ありあまは昔徳景て順掌一  
 此徳をま一ありが常く想ひ一とく花陽に對面せん  
 かりひもつゝも調ひられが日は乃念成能せりと花陽の  
 候ひ深ク變化乃形振をつよといあさうも連小のそは國家  
 の憲法とつゝひ君穩小諸民を安んといさう忠義をあふ  
 さんと聖日候て侍よりけりさふても大長の中我  
 深切なる孫安ふ此事を告す重んずものと其初彼彼小  
 立城と對面候とい先達てをまじり花陽の脈を診し  
 太子一密に言ふさて一話を物語り通塞候命せり  
 ましも金くりりて此候と候ふ下明日百され意て  
 の旨教を花陽があふあわく述解さるる一との使命せ  
 るるを定めて渠と同答候させあふ一よの西公あふ  
 何ぞや渠ふ口候國さるる片時もよく渠を除さふ事

の患乃元紙絶ち太子乃法公を仰ぐか一諸民乃安  
 然あつしゆが死せしむる死よわの我ゆも密に  
 太子一言とあつて福便了集紙退者らるる一とか  
 ましの外怒りあふにかくは外紙家りわくまに  
 命あましく後ふり法心屋を彼故婦をかあつて  
 人間あつとと始終つよふに結けきを孫果一きびを  
 おどろき一とびと感入わの志忠義の志紙母く  
 ねなり既小棄又同席よりねえんと太子を陳は後  
 成業つしより某同列と公を合せいりおりの彼夫人  
 を去んとユ吏とてとを先さし高てのわいの中も  
 公を愛つた一然ども是下身をやまさんと甚是末

たり明日某朝小出く太子小錫一なり是下の紙  
 義もあつて福ひを扱ふなり能も始終の抱子を  
 若らし事ゆらまし一と随分ユ吏あつて論毎せん  
 事公小くもてゆらるる梅義の白に務まらぬ尚又  
 言ふ紙とて某も半のなむと昔ありと扱扱一と  
 けり紙のめまご者徳い初より用紙紙ととの紙て  
 殿中に一と一とあつて出仕せし紙を扱ふ一と  
 ねど志つしとあつて唯今席へ出る一花陽夫人  
 先達より不審の子細もわきま直小尋あつて



三國文苑作日録卷之一

三國文苑作日録卷之一

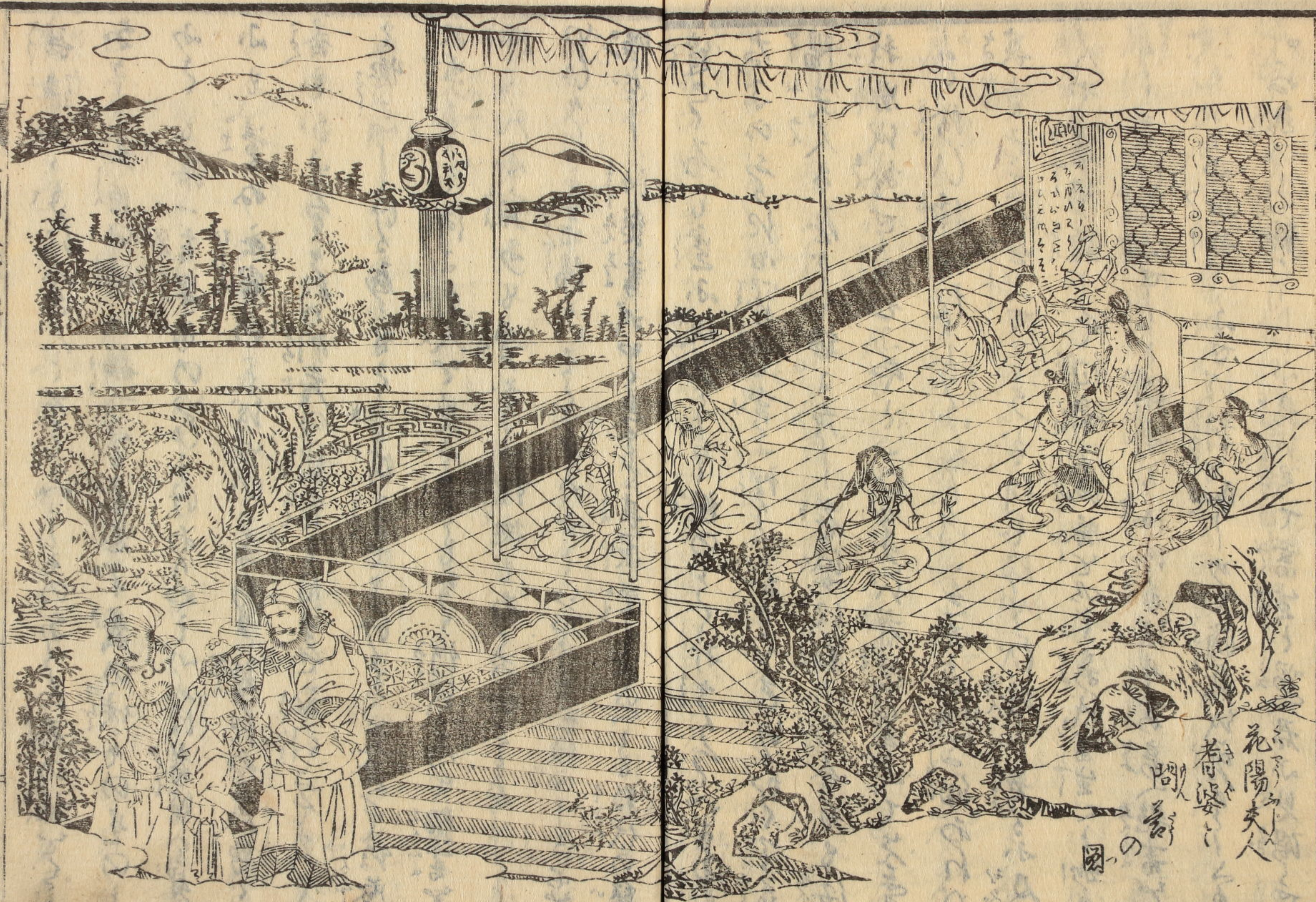
一六

三國文苑

天皇の大臣  
老婦と  
對話  
の  
圖

の命なりと遠しきれば普賢の中しをふ悦び十分に  
 多しふせき恥辱致あといづまろの悪婦を退さんものと  
 席にさるんで所中又渡しけり大臣孫晏雄明君  
 鶴岳又城下ト免百官有司おのく威儀堂々と列座  
 一理くの百司を末座ふあしひく想より正面ふを  
 簾と半々捲あぶ襷紙多くへ花陽夫人の座とる  
 かくて花陽夫人の官女あゆみ最後より扈從せしめ  
 餘くと立おれありさぬ羅綾紗縹にすくはき容教乃  
 うりりしき花も紅葉もいとる是よあふべし月氣よ  
 天女の降るるうとあやまらふあまに思えられと諸官  
 遠るるも空小恍惚とて現のまく打ちりくへいふも  
 太子のふり心も驚き実し懼りしおりのまきわかくて美  
 陽夫人を座かく襷紙座一普賢に對して今日も汝  
 我脈成珍せんをふやといひ多き普賢とあてて先を  
 ぬく珍し縁神たしふ知りはるるたあるる細われは  
 其旨太子へ云上でしうを何とゆふに珍し老ふ及  
 人や美陽雅トて曰前は汝脈をぬき妾成畜生くと知る  
 君に云と口しと聞是も汝情をぬき妾成艶書と  
 讀りし小逆婦ふせび割れ恥めて消息成るる  
 叶ぬ急の急勢ぐりし小妾成号て畜生と罵る君小見賜とせ

の命なりと遠しきれば普賢の中しをふ悦び十分に  
 多しふせき恥辱致あといづまろの悪婦を退さんものと  
 席にさるんで所中又渡しけり大臣孫晏雄明君  
 鶴岳又城下ト免百官有司おのく威儀堂々と列座  
 一理くの百司を末座ふあしひく想より正面ふを  
 簾と半々捲あぶ襷紙多くへ花陽夫人の座とる  
 かくて花陽夫人の官女あゆみ最後より扈從せしめ  
 餘くと立おれありさぬ羅綾紗縹にすくはき容教乃  
 うりりしき花も紅葉もいとる是よあふべし月氣よ  
 天女の降るるうとあやまらふあまに思えられと諸官  
 遠るるも空小恍惚とて現のまく打ちりくへいふも  
 太子のふり心も驚き実し懼りしおりのまきわかくて美  
 陽夫人を座かく襷紙座一普賢に對して今日も汝  
 我脈成珍せんをふやといひ多き普賢とあてて先を  
 ぬく珍し縁神たしふ知りはるるたあるる細われは  
 其旨太子へ云上でしうを何とゆふに珍し老ふ及  
 人や美陽雅トて曰前は汝脈をぬき妾成畜生くと知る  
 君に云と口しと聞是も汝情をぬき妾成艶書と  
 讀りし小逆婦ふせび割れ恥めて消息成るる  
 叶ぬ急の急勢ぐりし小妾成号て畜生と罵る君小見賜とせ



花陽夫人  
若婆  
問  
の

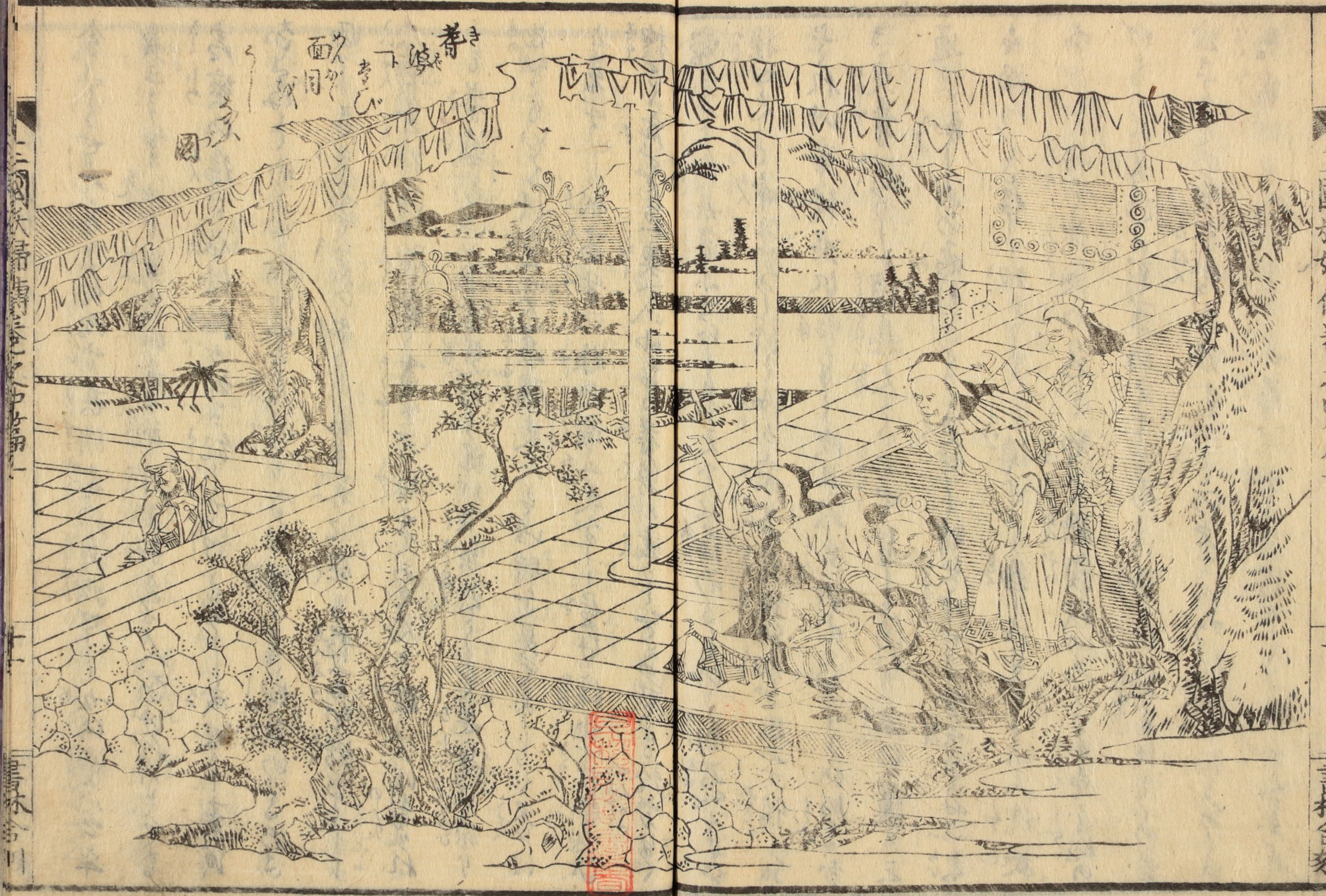
三國志外傳中卷之二

八

書林合刻

其後汝がもて入るんとせむいゝものありし君の福をく  
みり、君臣の禮以辨へざる不忠不義の徒その是の  
みくも汝一言半句のいひけりやとよに昔の身  
ふも賢ぬ云實のこけいひのあらき勢にあられ替く  
答もふさうなれば刑府の徳官も目せ袖にこそとく  
と惚忘しける身有く昔の身てやけり先達て吟吟  
に出せしは汝又主人を思ふともなく何れりて絶書を  
贈らん小言少も賢か一禮扱もあつた出さるる一と  
いひたれそ花陽がいく身ハ女といふもこのふりまはせ  
漢をい汝絶書以てまると其罪重しといふも教代の賢

家までを其道ふらりて天下に益あるもの一團忍ぶを是を  
損せんと申意ありけと汝の家名先祖の功を思ひて憐れ  
きれ此事汝君に告もつて見ぬ意にあらざりとの儀を  
き文章送り一消息大なる大中なりきれた末の二通り三  
通ふ恥の爲討のまゝたせし時大中をいひせきせし書  
をゆつく存一切きまると傳せし書は是ぞといひ禮扱  
あらを惜ぐ禮扱ありやと却て雅類以ていひ不存極の  
曲とのなりかゝ新事のものもあらぬ極の絶書汝とめ重  
出さんものを毎念ふ方はやとの事以巧む汝と知るあり  
絶書以君へさし上其節以過る罪せんは残念あり



香下  
面

三國志

書林



今さらうせ人方々此治中其消息の元治中一女の童、五年  
 身より里はく病と知る斗外に知る人あければとても  
 書家の病はるるに治かかして知らば一歳に事成  
 あさふとわくといひつる人情もあはれ候しきか候はるわさ  
 師一きりあて君の病一ある病に能く醫書を賜ふ  
 大膽な極は、脈を診、畜生の脈をわんと散くは言え  
 とも春婆といふおも費わく候は唯強忍して無病候はる  
 病をもいふに在る、真陽夫人を此時を見て、  
 出来す、彼畜生の脈の倫工を、一昼に候ふ、  
 候く所を立奥へ入り、春婆の歯を、  
 見よ、脈法醫術ふあ、  
 も折んをのし、  
 候くは醫論ふあ、  
 花陽夫人春婆と醫學論を、  
 花陽夫人今日庭中にて春婆との論候、  
 ざり、花陽の綱つら、  
 候き、  
 一と、  
 思ひ、  
 あれ、

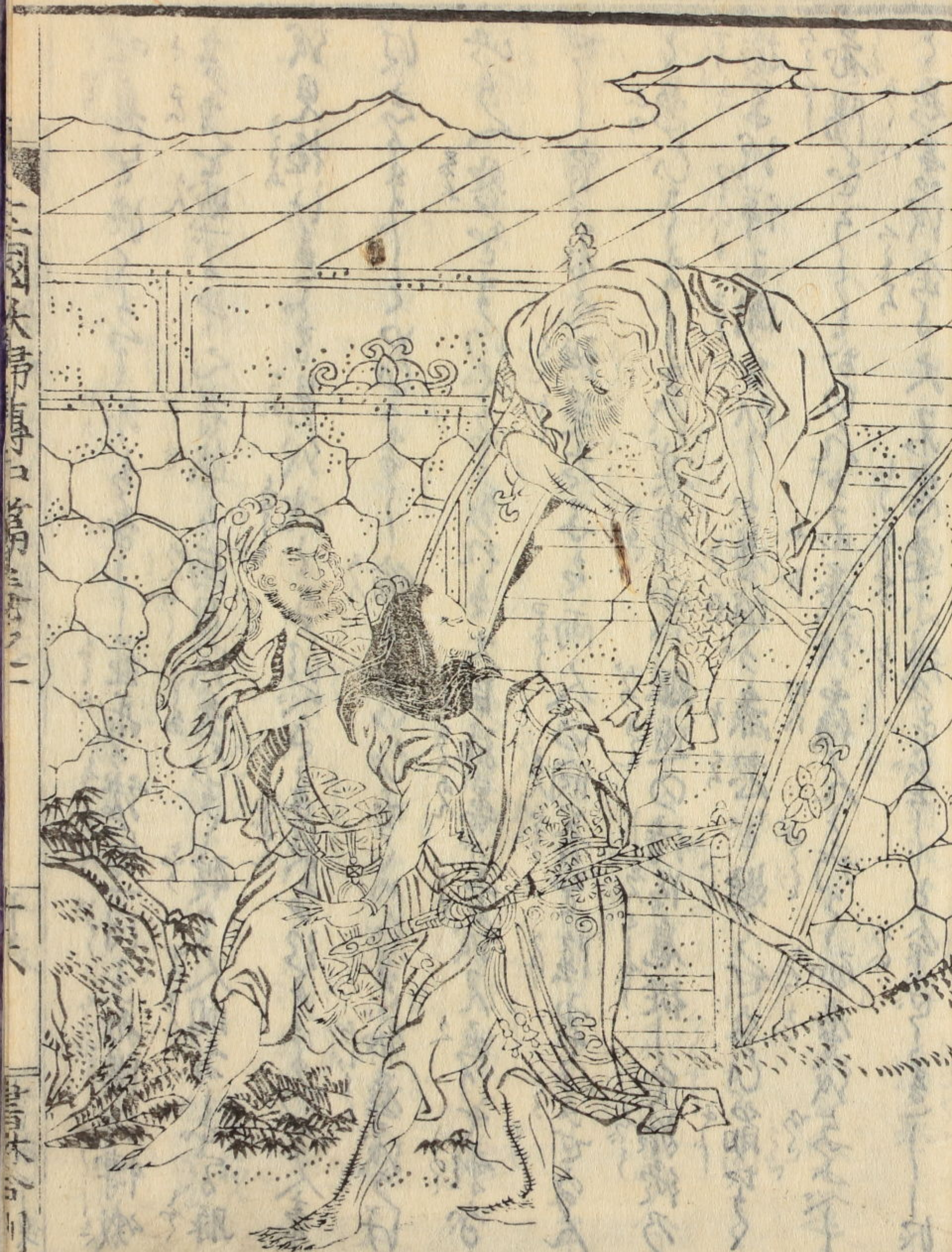
見よ、脈法醫術ふあ、  
 も折んをのし、  
 候くは醫論ふあ、  
 花陽夫人春婆と醫學論を、  
 花陽夫人今日庭中にて春婆との論候、  
 ざり、花陽の綱つら、  
 候き、  
 一と、  
 思ひ、  
 あれ、











三國志卷之八十一



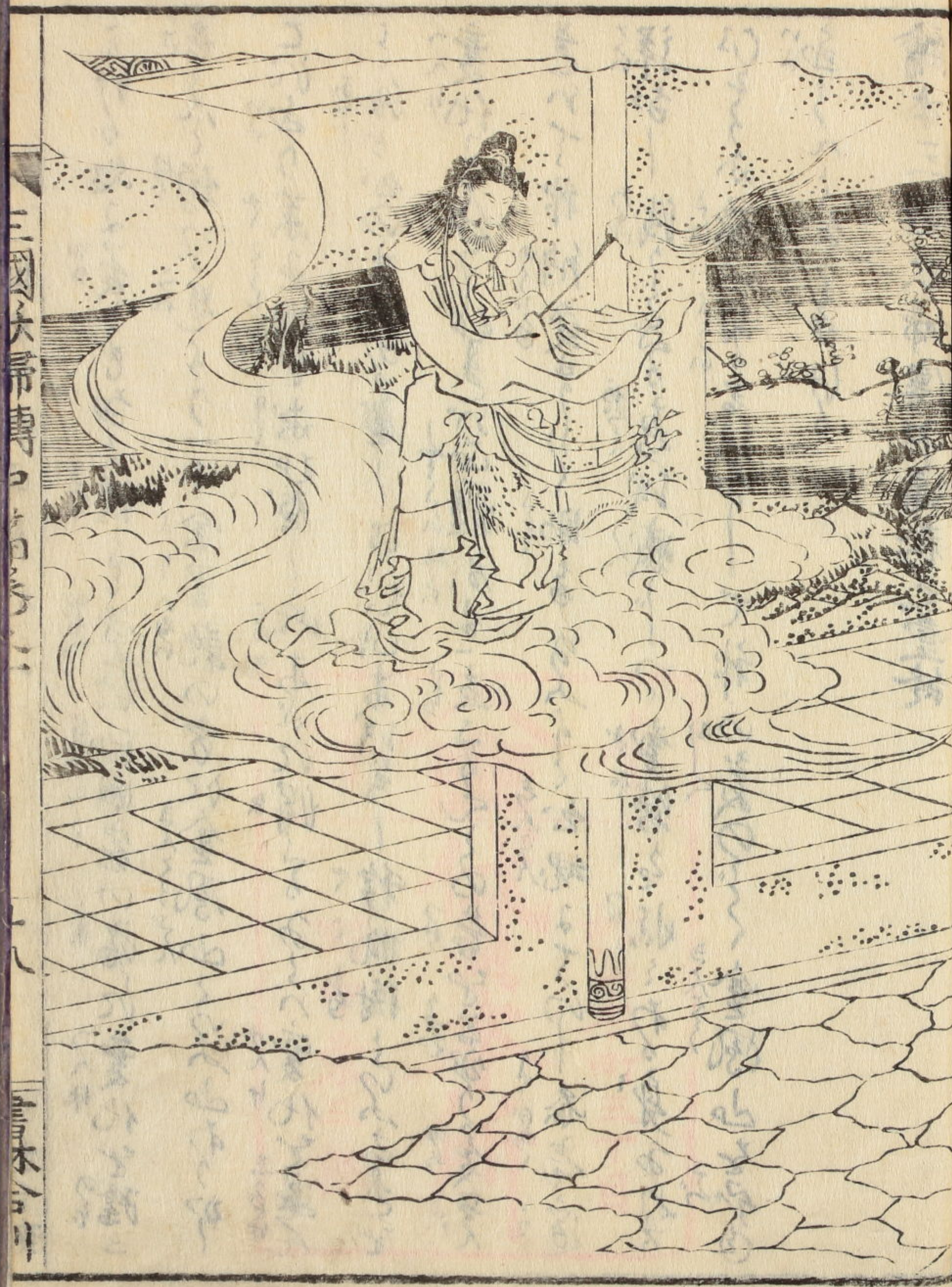
普婆  
 面  
 發  
 家  
 送  
 國

三國志卷之八十一

十五

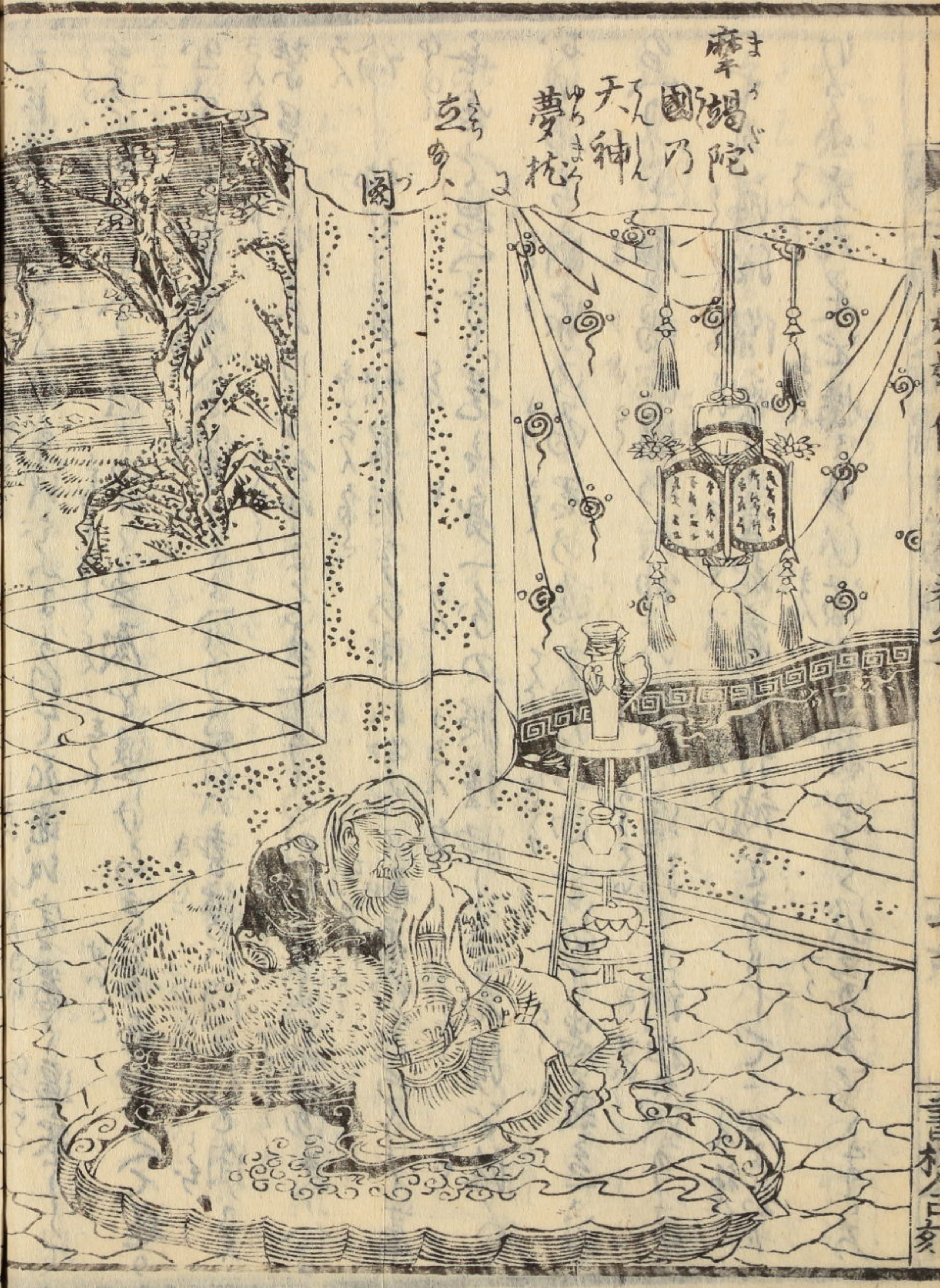
三書校合刻





三國大皇帝

言木



夢枕天國乃陀  
立身

言木

三ヶの処より後ともありて現るも予は汝國家の爲に變化を降す  
 さんと願ひて是より一千余里乾の方に金鳳山といふ山ありか  
 こにあり茶五樹を求むる一此本に得るありて變化を降す  
 と汝が公のまゝありて一此本に得るありて移柩樹といふまを  
 變化するやうにむきかへ正體形をまゝとするの苦を尋りて  
 きて神神受まりし助ありて公魂をたのしむる一此本に得るありて  
 洋おし海へ出る志は感づき驚きを懐くわの身あはれ  
 ひそふ旅の用多しあて神の義のぞく金鳳山をめぐ  
 りてんといふまをけり

繪本三國女妖傳中編卷之壹終

イ

**金貸本所**

ヨ

松山本町三丁目

野中栄三郎

